

ギトランクールの序文

精神分析家の資格試験は、世界のどこにも存在しない。それは偶然でも不注意からでもなく、精神分析とは何であるのかの本質に由来するいくつかの理由のためである。

精神分析家を決める能力試験がどのようなものなのか、私たちには分からない。精神分析の実践は私的な次元のものであり、患者が最も内奥の思索を分析家に打ち明けることに取っておかれている。

分析家がひとつの操作、つまり解釈によってそれに応答し、解釈は無意識とよばれるものに関わることは認めよう。この操作は試験の教科科目となることが可能なものなのだろうか？ 解釈は精神分析の専有物ではなく、テキスト批評や、資料、書かれたものに対する批評全てが、解釈を用いていることからするのなら。しかしフロイトの無意識は、私が述べたパロールの関係においてのみ構成されており、パロールの関係の外においては公認されえない。そして精神分析的解釈は、それ自体においては確かなものではなく、解釈を受け取る者（分析主体）において引き起こされる予測不可能な効果によって、さらにこの関係自体の枠組みにおいて、確かなものとなる。それは逃れられないことである。

つまり、分析主体こそ、ただ一人、精神分析家の能力を証明するために受け入れられるべきであろう—その証言が転移の効果により歪められていない場合の話ではあるが。転移はすぐにたやすく確立されるものであるから。なされた分析作業にかんして受け入れ可能な唯一の証言、何らかの保証を与える唯一のものは、転移後の分析主体のもので、かつ精神分析の大義になお仕えようと欲する分析主体がする証言であろうことは、すでに分かったことである。

ここで私が分析主体の証言と名指しするものは、本質的に私的なひとつの経験のなかが公衆に伝達しうるのかという問いに証言が応答するかぎり、精神分析の教育の核となるものである。

この証言を、ジャック・ラカンがパスという名で確立した（1967）。この教育活動に、ラカンはその理想を与え、それがマテームである（1974）※。パスからマテームに至るまで、そこにはあらゆるグラデーションが存在する。パスの証言、まだ主体の特殊性を完全に負っている証言は、分析的グループの内側の、制限されたひとつのサークルに隣接している。（他方）論証的であるべきマテームの教育は、あらゆる人のために存在する。そしてそこでこそ、精神分析が〈大学〉と出会うのである。その経験はフランスでは14年前から続く。シャン・フロイディアンによってベルギーではすでに知られていた。この1月からはセク

ジョン・クリニックの形式で行われることになる。

この教育がどういうものなのか、そしてどういうものでないのかを、私は明確に述べなければならない。

—この教育は大学的なもので、つまり体系的で、段階を踏むものである。それは資格をもった責任者たちにより与えられ、つまり資格証書によって認可されている。

—精神分析の実践に関しては、この教育が資格を与えるのではない。フロイトが定式化した、分析家は分析されなければならないという命令は、ラカンによって確認されただけではなく、分析は分析家を産出する以外の終わりをもたないという説によって過激化した。この倫理を逸脱するなら、そのつけを高く払わなければならない。掟を破った者はかならずそうなるのである。

—それがパリであろうが、ブリュッセル、バルセロナであろうが、その諸様相が国家的なのであれ私的なのであれ、それこそがラカンのオリエンテーションのものである。それを受け取る者たちが参加者として定義される。参加者という語が学生という語よりも好まれるのは彼らに与えられるイニシアチブの高い度合いを強調するためで、提要されるその仕事は彼らから無理やり奪われはしない。その仕事は彼らにかかっているのだ。仕事は先導され、評価される。

そのジャンルで前例のないジャン・フロイディアンにおいて教える機能に挑戦しようとする者たちに、最も厳格な要請が及んでいると提示するのにパラドクスは存在しない。なぜなら周知のように、知は一貫性という権威を持つとしても、無意識においてのみその真理を見出すからである。つまり「私は知る」と言うための人が誰もいない場における知については、知を前代未聞の練り上げによって支える—それがどれほど慎ましいものであれ—という条件でのみ、私たちがひとつの教育を惜しみなく与えるということにより表現されるのである。

私たちはスペイン、ベルギーでこの教育の臨床部分から始める。臨床はひとつの科学、つまり証明されるひとつの知ではない。それは経験的な知であり、思想史から分かちがたいものである。臨床を教えることで、化学の進歩がしばしばその古典的な宝物をおざなりにする、ひとつの精神医学の欠陥を補うことしか私たちがやらないわけではない。私たちはそこに確実性の一要素も導入する（＜ヒステリー＞のマテーマ）。

患者呈示は明日この教育を織りなすだろう。フランスで深化された研究（DEA）と言われる領域—博士課程論文作成の途上にある—が、のちに加わるだろう。

かつてラカンの指導のもとにあったものにふさわしく、私たちは一步一步進めて行こう。

1988年8月15日 ジャック＝アラン・ミレール

※ギリシャ語で **mathema** は学ばれるもの、の意